

## くせものがたり贅注 (1)

三 沢 諄 治 郎

## 〔竹窓の書翰〕

御うはさのくせものがたり、拝借候て寛々拝見いたし候。天王寺の法師がくすしの条、物産老人の類、屈江書家のくだり、其人々を見るやうにて飽かず繰返し見申候。誠に人には一癖とて、才有人は才を相手とし、わるがう者はわるがうを言ひ倒さんとするが癖にて、いづれ其才其癖を持腐りにはしがたくて、夫を捨てて仕舞ごもく場を拵らゆる物なれば、此本の作も定めて其ごもく場なるべし。其種につかはれたる人も定めて才子かわるがう者なるべし。是を面白と見る人も亦痴人にはあらざるべし。われらも其中間入にと一本を写して原本を御返上申上候。法論味噌一曲、薪より貰候。其御口へ御あがり可被下候。かしこ。

上田翁の御もとへ申参る

竹 窓

〔注〕 ①天王寺の法師 本文第九段「仏の教に賢き法師ありけり」の

条をさすらしい。本文には何処の誰とも明記はないが、この書翰によつて、これは当時天王寺にかくれもない僧であつたことが察

せられる。

②物産老人 第十四段「昔鳥獸草木の類の世に見知らぬをば普く見わかつ師あり」にあたる。即ち物産家として有名な木村兼霞堂を指す。

③屈江書家 此の句の指す所は明らかでないが、第十七段「昔都がたに物語いとをかしう書く人ありけり」がほぼそれらしい。なお補説を見よ。

④法論味噌 つまみ物の一種。一説に奈良興福寺に維摩会の法論のある時、法師の食うもの故この名があるという。七十一番職人尽歌合の絵に「われらもけさならよりきてくるしや」という詞があるから、古くは奈良で造つたのであろう。なお補説あり。

⑤薪 京都府綴喜郡田辺町字薪。(補説参看)。

⑥竹窓 大阪の書家森川竹窓。竹陽とも良翁とも号した。名は世黄、字は離吉。天保元年(一八三〇)六十八才で歿。秋成には三十年ほどの後輩であるが親交があつた。秋成の墓碑銘を揮毫した人。

〔補説〕 ①「屈江」の二字は、竹窓の書翰が草書で達筆に書かれていたので様々に読みとられ、温知叢書・国書刊行会本・有朋堂文庫

には「屈候」と読んでいのが何の意味か解りかねる。名著文庫では上の一字と続いて、

尽ことごとく屈まが候まが書家

としているが可なり苦しい。鈴木敏也氏「雨月物語評釈」巻頭の解説中には之を「居候」としてあつたが、そう読めるかどうか傾かれる。藤井紫影博士校訂の「雅文笑話集」解題に

「屈江（堀江）書家のくだり」

「屈江書家は平岐薩陽（通称平助、北堀江町四丁目住）でもあろうか」

とある。堀江から屈江が導き出されることは無いことではない。字典には、屈の代りに屈を用いた例や、屈起の代りに掘起又は屈起を、屈強の代りに堀強又は屈強を用いた例が挙げてあるから、之を推して堀の土扁を省いて屈を使用したものと見られぬことはない。漢字に扁を省略する例は相当に多く、試に土扁の部だけを挙げて見ると、境と竟、塚と冢、泥と泥、塘と唐、増と曾、塙と婁、堡と保、塘と庸などが公然通用せられてゐるし、これを實際の例に徴しても、京都の儒者、堀景山が氏を修して屈氏と称し、安芸の堀正修も屈南湖と称したのは有名である。これらは恐らく楚の屈原にヒントを得たのであろう。殊に書家はこうした省略字を使いたがる癖が多いようである。屈江を堀江と読むのは他に有力な説のない限り最も穩当なよみ方であらうと思う。

② 「法論味噌」については貞丈雜記卷六に

ほろ味噌という物も古よりあり。職人尽歌合にほろ味噌売見えたり。ほろ味噌は焼味噌をして日に乾かして、さて細かに

刻みて、胡麻・麻の実・胡桃・山椒などを切り雜せてほろほろしたる味噌なり。

とあり、その七十一番職人尽歌合、第十八番には、

夏まではさし出でざりしほろ味噌

それさへ月の秋を知るかな

うとくのみならの都のほろ味噌

ほろほろとこそねはなけれ

という歌があてられ、人倫訓蒙図彙によれば、

法論味噌、黑豆にて製するよし、町へ売りに出づる男、柿染の帷子を上張に着る事、これ法論味噌売りの簡板なり。曲物に奇麗なる麩を掩ひ、さし荷なひ、何方にても下に直ぐに置くことなし。一方を高き所へもたせ置き、人に踏み越えさせぬよし、子なき女この棒を越ゆれば必ず懐妊すといへり。

とあり。なお諸説は大言海などに詳しい。山城の薪地方は今でも法論味噌を名産とし、一般には寧ろ「一休寺納豆」或は「納豆味噌」と称する向が多く、中にも薪所在の一休寺で製するものは其の味が良好だということである。京都の「大徳寺納豆」も同趣のものであろう。

③ 「その御口へ御あがり下さるべく候」は気の利いた句である。皮肉と諷刺の辛辣な貴下のその御口には法論法師のたべ物がよく似合いましよりの意であらう。

（序）

（刊本にはこの字がないが、写本に見えぬ）



この物がたりは、朱雀すしやうのくつわが塗桶ぬりけりの中にへしこめてありしなり。作者は誰とも記さざれど、伝へていふは在郷ざいこうの中將とかや。さだめて田舎道場の新発意しんぱついどのが、やつし腹して才まぐるものか。文辞ぶんじの京めかせると、故事を雅俗みやくに摘とらまれるとを、これやそれと聞きのつぶての当粹あてずるな首書かみかきして、おのが洒落しやれ社中しゃちゆうにひけらかさむとす。されば吾妻あづまに京伝きやうでんあり、こゝに都みやこのやぼ伝でんが、まはらぬ筆は春日野かすひのの若紫わかしずのすりこ木こぎちやまで。

〔注〕①朱雀のくつわ 京、鳥原の遊女屋。「くつわ」は亡八とも書き、遊女町、遊女屋、遊女屋の亭主などの異名。

②塗桶 真綿まわたを載せて引き伸ばす桶形の道具。多くは瓦製、或は木製漆塗しやうのものもある。形が人の首のようで下の方に口をあいたような穴がある。真風の句に、

積綿つみわたか塗桶ぬりけりなりの庭の雪

貞 徳

又、柳樽やなぎづきに、

(初 篇)

ぬり桶ぬりけりはいちち化けよい姿なり

( 〃 〃 )

塗桶ぬりけりへ書いて口脱くちだけば指さしで消し

(七 篇)

③へしこめて 庄むらし籠かごめて。以上「朱雀のくつわが塗桶の中に」云々は、顕昭けんしやうの袖中抄そでちゆうしやうに、業平なりひら自筆みづかみの伊勢物語いせものがたりが朱雀院すしやういんの塗籠ぬりかごに仕まい込まれてあったのを、民部卿たみべのうぢの局つぼみ(定家の女)が発見したという所謂塗籠本の由来ゆらいに擬なしたのである。

④在郷ざいこうの中將ちゆうしやう 在郷は田舎、「ざいご」ともいう。伊勢物語の作者といわれる在郷中將ざいこうちゆうしやうに擬したのは言うまでもないが、秋成あきなるの「よしやあしや」の巻末に

このふみも在郷中將ならぬ。在五物語してとある、それも田舎の意である。

⑤やつし腹して才まぐる 氏うぢ素性を虚飾うそざしして思おもう存分ぞんぶん智恵ちゑ者ものぶる。

「才まぐる」は恐らく「才まぐる」の上方方言である。才をてらうこと。腹は素性で、本妻腹ほんさいはら・嫡腹ちやくはら・妾腹めかけはら・外借腹けいせいはら・劣り腹せうりはらなどを使う。

⑥当粹あてずるなかしら書して 推量おしりやうな頭注かぶづを施して。当粹は写本に

「当てことなる」とあり、秋成の世間よこしま変形へんけい氣きに

京はどこらと、あてずるな事ぬかすゆゑ

という句例もある故、あてずっぽうの意に解すべきで、或本に「たうすい」と読ませているのは採りかねる。

⑦吾妻あづまに京伝きやうでんあり 江戸えどに山東京伝やまとうきやうでんが居る。関東の癖くせに京伝きやうでんと号したのを冷ひややかしたのである。

⑧都みやこのやぼ伝でん 京都きやうとの不粹ふそい者と自稱みづかみして京伝きやうでんと対句にしたもの。当時の洒落本しやれほんには野父天のふてんと書いたのが多い。

⑨まはらぬ筆ふでは春日野かすひのの伊勢物語いせものがたり、第一段にある歌、

春日野かすひのの若紫わかしずのすり衣すりえしのぶの乱みだれかぎり知られず

をもじった洒落。この歌は新古今集しんきんしゅう恋の部こいのぶにもあつて業平なりひらの詠よみとなつてゐる。こゝの文では「まわらぬ拙筆せつふでは摺古木すりこぎ同然どうぜんじゃ」の意で、摺古木すりこぎはすり衣すりえのもじりだが、秋成あきなるの手が痘瘡うしほのために指が缺かけて不具ふぐであるのを自嘲じやうこしたのである。

⑩まで 江戸時代えどじだい通用つうようの一種いっしゆうの敷衍ふえん。軽い自棄みづかみ的なあきらめの感かんをあらわす。近松ちかまつの天あまの網島あみのしまに、

「ああほんに、何処どこでやら落おしてのけた。誰たれぞひるたか知らん

まで」

又、秋成の世間妄形氣に、

木に餅のなる言ひ方に、「それは急に見たいまで、外へ知らずな」

とある。現代でも岐阜地方の方言に残っている。森山草平の輪廻に、

「そりや、生きちよるからには助かつたんぢやらうまで」

その他の地方にも多かるう。昔は「狂言」にも用いた。

### (序 段)

(こゝに小見出しは原本にない、今便宜のためにつける。以下同じ。)

人毎に一つの癖とは、昔々の諺ぞかし。今の世の人は、心辞ココロジの癖の外にも、起つに癖、居るに癖、それにもこれにも癖なきはあらぬを、みづからは癩症と通るるを、他人からは悪癖わるくせとも氣儘病とも名づけたり。さて、その講ことばれる人も亦この癖のなきはあらねば、人の癖が世の相あひまとなりて、高きも卑しきも、京も田舎も、普ねく云ひはやす癩癖かたがね談を、癖ものがたりとも読めば読めかし。昨日も昔、さきの間も昔、一昨日、跡の月、去年の大昔、十とせ廿とせのとつとの昔までを、語りつゝけて、冊子ちふしめくものとはなりけり。

〔注〕①とつとの昔とつとはずつとに同じ。近松の曾我会稽山に

「昔の昔のとつと昔のその古」などがある。

②癩癖 他人に対する神経症的な潔癖のことであるが、それは全く病的な神経の生んだ自己中心的なもので、気まま病と名づけられ

たのも尤もなわけである。然し単なる品性上の悪癖でないことは、医書、衆方規矩に、

△癩症 諸事心ノ如クナラザル故ニ、言真偽ヲ交ヘ、人ニ向ツテ高声ニ語り、或ハ忿怒シ、或ハ罵詈雑言ス。精神守ラズ、喜ンデ笑ヒ常ナラズ、言語錯乱シ、妄見妄言シ高キニ上リ罵詈雑言ス。

と出て居り、之に対する方劑を示してあるのでもわかるが、要するに、人のアラが無やみに頭痛の種になる一種の神経症状には違いない。

なお、この段に述べられた著作態度については拙稿「くせものがたりの初稿本」に詳しいので参照せられんことを乞う。(甲南女子短大論叢、第一号、一九五六年刊)

### (補説)

①秋成の癩癖 秋成は自分の癩症に対してはつきりした自覚をもっていた。頼まれて高井几童の吉野紀行に序文を書いた折、印刷費用の関係で、文章が長過ぎるとして編集役の柴暁から書き換えを要求せられた時、くつと癩の虫にさわり、友人の呉春へたたくつけた手紙の中にも、

風流の意味は随分承るべく候へ共、名と利との事は我等日本一の赤下手、一身貧窮の分野この事に候由申置候也。かやうの氣味合承り候こと却りて迷惑のことに候へば、まづ／＼此の度はお断り申置候。そこで又例のエラ癩癩などと悪名を蒙り候ことも苦しからず候へ共、かの御迷惑の事を我等癩癩にして是非なく入板なされ候こと甚だ気の毒に候云々。

と憤慨しながらひねくれたかと思うと、その追申に、



急ぎの便ゆゑ、例より荒々しき文調、橋本流の墨けしやら不礼重なり候も、エラ癩癩の模様に見なされ申すべくと悲しく候云々。

と言ひわけをしている所など、癩癩もち特有の小心なところが見えて、人間秋成の面目躍如たるものがある。ついでに、橋本流というのは友人橋本経亮である。又、自己の小心についても、秋成の自意識はつよく働いて、自ら「無腸」を号としたのは内柔外剛の意であるし、面白いのは彼れの大好きな人物、唐の孫思邈の「胆欲大而心欲小、智欲大而行欲方」から採つたと覺しい隨筆の名を胆大心小録とせずに「胆大小心録」としたことで、これも無腸と同趣の自嘲味たっぷりな表現である。

(第一段) (ならぬ狂言を假にも出かしたがる男)

○昔男ありけり。ならぬ狂言を假にも出かしたがかりけり。それを譬へて云はば、儒者たちの経済りきみ、国学者の上古ごがれ、えせ歌よみの万葉狂ひ、俗あたまの坐禪編法、二代金持の縁者のぞみ、世になし人の先祖よばはり、小借家住の茶の湯ぶるまひ、また、医者いしやの漢魏見識も同じことながら、仲景・孫思邈・東垣・丹溪も、癩をまじなふ八はらひの算盤爺も、猿が餅になはずが正銘、それを措きては、引経運氣論も病因隨症も、筆端ふで弁正は木太刀の芝居ごと、いづれ其験を見ずには信じられぬ事ともなり。昔人は、かくいぢびりたるわれ賢をなん力み合ひける。

〔注〕 ① 経済りきみ 経済は経国済民で政治向きの経綸をいう。儒者

たちが経書などにかじりついてばかり居る癖に、まるで天下國家を左右でもし得るかのような大きな議論をしていること。

② 原注に、「国学者とは神道者に三筋毛の多いまでの学業なり」とある。恐らく本居宣長らをめあてにしての皮肉であらう。

③ 俗あたま 有髪のまゝの。親法は悟道に入る修行。

④ 縁者のぞみ 一代目が汗と膏とで働きためた百万長者の息子どのが、大家の若様氣取りで、やれ某公卿のお姫さまを迎えたいの、一城の主とでなければ縁組みせぬなどという高のぞみ。

⑤ 世になし人 零落した人。

⑥ 漢魏見識 漢魏時代の名医を氣取つて医道を論ずること。こういうのは手許の匙加減が頗ぶる怪しいのである。

⑦ 仲景 後漢の名医、姓は張、名は機、南陽の人。政治・文学二道にも通じて長沙の太守に任ぜられた。但し平田篤胤の「医宗仲景考」によれば、張機、仲景はみな寓名で、実は三国の呉に仕えた葛玄、字は孝先であらうという。葛玄は晋の葛洪(即ち抱朴子)の従祖である。傷寒論の著者。我国には早くから喧伝せられたと見えて万葉集巻五、山上憶良の漢文中にも仲景の名が見える。

⑧ 孫思邈 唐の薬方の大家。華原の人、百家に通じ善く老狂を言い兼ねて陰陽推歩医業に詳しかった。太白山に居り、唐の文帝が国子博士の待遇で召したが応じない。太宗が漸く召して京師にいらしめた。然し年すでに老境、これを官に就けようとしたが聴かず、疾と称して山に還つた。世に孫真人と呼ばれ、千金方を著す。

⑨ 東垣 金の時代の名医。姓は李、名は杲、字は明之、東垣と号す。真定鎮州の人で、金の医士張元素に学びその妙を得た。脾胃論を

著して病原多く脾胃から出ることを論じた。その他著書が多い。

⑩丹溪元の名医。姓は朱、名は震亨、字は彦修、金華義鳥の人、天資爽朗、読書大義に通じ、後に医理を研究し治症の上の奇行が多かった。東垣・丹溪二氏の医学は之を李朱医学または金元医学と称して、我国では織豊時代に田代三喜・曲直瀬道三らによって唱道せられ、張仲景を宗とする古方医学に対して後世医学とも呼ばれた。

⑪猿が餅に右から左へ直ぐさま弁ずる。猿が餅を買ったようだという諺から出た語で右から得て直ぐに左へ与える意とも、又すぐ食べてしまう意ともいうが、とにかく、「すぐ様」とか、「現金に」とかいう義の副詞に用いられた。「紙子仕立両面鑑」に、

「こちらにも急にいる金ゆゑ、猿が餅に三百五十両……」

「返舎一九の「金草鞋」初篇に、  
「ぜにさあは、さるがもちやの御亭どの、ぬれ手でつかむあはのあきなひ」(目黒不動)  
「戯作外題鑑」によれば天明三年刊「現金猿が餅」というのが見える。

⑫引経運氣論・病因随症。何れも漢土の医書と見えるが詳細不明。

運氣とは木火土金水の五気を云い、医道にこの運氣を論じた書は少なくない。「素問入式運氣論三卷など有名である。秋成の春雨物語「天津処女」に

医士の素難の旨を学び、運氣六経をさとりたるに同じ。

因より症をしたひて、病さぐりて病癒えしむるに似たり。と見える。

⑬いちびりたる。図に乗った、調子にのった、つけあがった、等の上方方言。

〔補説〕①作者の癩癩玉が先づ浮世の生意気ものに対して滅法八つ当りに爆発した一節である。儒者・国学者・歌人・禪家・富豪・茶人・医者などに対して一喝三十棒をくらわせ、出来もせぬ狂言を形だけなりとも出かしたがる不埒者として片づけた。秋成の随筆「胆大小心録」はこれらの人々に吐きかけた毒舌で奇観を呈しているが、儒者には中井竹山、その弟の中井履軒が槍玉にあがって居り、一体が儒者という四角張ったものに極度に反感を抱いていた秋成は、何かと親切に自分の面倒を見て呉れた友達の村瀬栲亭に対してまで、さんざ憎まれ口を利いている。

段々世が變つて五井先生(蘭洲)と云ふがよい儒者であった。今の竹山履軒はこのしたての禿じや。契沖を信じて国学もやられた。統落久保物語といふものを書かれて味噌をつつけられし事よ。竹山は山こかしと人がいふ。山はこけねど、こかしがった人じや。履軒は兄と違ふて大器のやうに云ふが、これもこしらへ物じや。(胆大小心録)

この「山こかし」とは今いいう山師のことだから、さしづめ「ならぬ狂言を仮にも出かしたがる男」にあたる。

村瀬は智者で小まへな故、風流のない人じや。さて大阪では評判の悪いことがあった故、書いたもの欲しがる者がとんとない。(同)

②国学者で目の敵にしたのは本居宣長、これは徹頭徹尾、痛罵を加えてやまなかった。「呵刈殿」は二人の論争記録である。秋成は



万葉調に近い歌人ではあったが、芦庵・萬籟以外の人々とは余り交際していないし、千藤などをばひどく毛嫌いしていた。それに猫も杓子も万葉の流風に狂いまわるのが癩のたねだった。何事にもあれ、流行に乗って半可通をふりまわすのが、ひどく癩にさわる性なのだ。当時の万葉流行を諷刺的に描写したのに三馬の「浮世風呂」がある。

③俗人の座禅狂は、諸道馳耳世間猿に秋成自らこれを描いている。

七三郎は七郎左衛門と呼ばれて、我が代知りたる顔に、もっぱら禅学に誇り、洞濟二派の悟録に眼を止めるより、自然と心高慢り、米市場に私子をふり立てて「午腹生か千俵売ろう、什塵三千買はうなどと、えしらぬ言葉をつかひ、僕見少婦が茶碗一つ破りしをも、喝と叫んで、三十棒を打ちけるにぞ、半季究めの奉公人は、中戸の客板を打って、放參々々と障りをとりにつける。(文盲は昔づくりの家蔵)

④茶の湯に対する冷笑は、彼れが煎茶の大家であるだけに面白いが、次の段にも第四段にも、殊に第七段に茶の湯を題材にしたのがあるから、そこで詳しく述べる。

⑤医者についても同様で、秋成は四十才から思い立って医術を学び、四十二才の時大阪に出て医を開業し、五十五才の春まで足かけ十四年間開業医としての経験を有している。然し、医者としての手腕がどれ程あったかは疑われるし、自分で、

不学不術の筈のこと故、人の用ひぬ事は知って居たが故、ただ医は意じやと心得て、心切をつくす趣向がついて、合点のゆかぬ症と思へば、頼まぬに二三べんも見にいた事じや。(胆大小

### 心録

と言つて居り、又、医者を廃業した原因の一つについて、

くすしの業を十五年が間つとめしに、若きより学び知らぬ事なれば、探る／＼おぼつかなき事のみなりき。行はれぬが幸なりし中に、走馬疔を見誤りて、いたいけなる娘ひとり殺したり。親は我見誤りとも知らずで、定業とて後々までも親しく招かれしは、心中小い恥かしき事なりし。(自伝)

と告白しているから、決して威ばれた柄ではなかつたろうが、それでも、世間の庸医どもが手前の腕の鈍さを棚にあげて、大家気どりの見識ぶりには、中年から此の道に入つた秋成の癩の虫が承知しなかつたのも無理はない。

⑥仲景・孫思邈云々は、名医を代表する江戸時代の通言で、前記「浮世風呂」前編にも、

仲景さまを二廻りで験が見えませぬから、孫思邈さまを中たびお願申して、唯今では丹溪さままでござります。

と見えているが、秋成は殊にも孫思邈の超俗的生活に私淑していたらしく、彼れの歌文集「藤葉冊子」に、

女郎花を植ゑて孫思邈を思ふ  
あまた植ゑて人やねためる女郎花

老を養ふ色香とを見よ

と詠んで居り、又、唐書隱逸伝に見える孫思邈の言を探つて、彼の随想録に「胆大小心録」と命名したことは「序段」に述べた。

⑦算盤爺——原本と見るべき文政五年刊本に、「繕をまじなふ八はらひのそろばん。爺も猿が餅に：」と句読を切つて居り、従つて

「甲 南 国 文」

創刊号

女三宮の読癖について……………三 沢 淳治郎  
敬語と性格表現……………岩 瀬 法雲  
—源氏物語から—

「大学」の書の解題……………艸 野 忠次

擬音語・擬容語の表現論的考察(前編)……………山 内 潤三

方言文法の方角……………鎌 田 良二

鷗外の訳詩—「沙羅の木」素描……………垣 田 時也

第二号

狂言寸言……………前 田 正 民

座談会—卒論をめぐって—

卒業論文要旨

第三号

中世の謎について……………三 沢 淳治郎

文法から文体へ……………岩 瀬 法雲  
—源氏物語の敬語について—

国文学と白氏文集……………艸 野 忠次

国語教育における方言の扱いについて……………鎌 田 良二

諸本も之を襲つてあるが、この点の切り方は板行責任者の誤だらうと思う。さて八払いの算盤云々即ち算盤で占いをする普通の方法は、第一に占う当時の年の十二支と月と日とを合算して八で除す。この場合、年の十二支には、子一、丑二、寅三というぐあいに数を与えて置く。割り切れずに余つた数によつて卦を立てる。例えば一余らば乾の卦、二余らば兌の卦とし、割り切れた時は八であるから坤の卦とする。第二に、前の如く年の十二支、月、日それに、時刻(子の刻一、丑の刻二の如く)を合算して、これも八で割る。而して剰余によつて卦を立てることは前の通りで、出来たものを上卦とし、上下卦を合して卦意を判断する。例えば、上卦が乾で下卦が兌ならば、

乾兌の卦、即ち「天沢履」

の卦が得られる。尤も普通には上下卦を立てず、一回だけの卦で、直ちに

一 乾天長地久(上吉)      二 兌唇口舌(下凶)  
三 離陽南星(中吉)      四 震大命風(上吉)  
五 巽出世(上吉)      六 坎貧不足(下凶)  
七 艮富貴高名(上吉)      八 坤遭危賊弱(下凶)

と判断する。このように、何処までも八で除するので「八払いのそろばん」占いというのである。(第一段終り)